



JIC インフォメーション

第 172 号 2012 年 09 月 25 日(臨時号)

年 4 回 1・4・7・11 月の 10 日発行

1 部 500 円

発行所: JIC 国際親善交流センター 発行責任者: 伏田昌義

<http://www.jic-web.co.jp>

東京オフィス: 〒160-0004 東京都新宿区四谷 2-14-8 YPC ビル 7F TEL: 03-3355-7294 jictokyo@jic-web.co.jp

大阪・ロシア留学デスク: 〒540-0032 大阪府大阪市中央区天満橋京町 2-13 ワキタ天満橋ビル 812 号 TEL: 06-6944-2341

□ 芸術の秋、食欲の秋、時には読書も！ シリア 秋も冬もロシアを満喫!!!



シリア
旧ソ連
国際交流誌



twitterでJICをフォローしよう!
facebook もやってるよ!

旅行・留学のお問い合わせはいつでもお気軽にJICへどうぞ!
<http://www.jic-web.co.jp>

— APEC 会議が開かれたウラジオストク —

“まちを歩いてみれば”

～ジーマのロシア、ウクライナ最新事情

・・・・・・トカチェンコ・ドミトリー・・・・・・ 2P

JIC ロシアセミナーのお知らせ・・・・・・ 6P

＜本の紹介＞

ロシア極東ハンドブック・・・・・・ 7P

＜本の紹介＞

恋に導かれた観光再生・・・・・・ 7P

旅行業の一断面(2)

～インバウンド旅行の光と影・・伏田 昌義・・ 10P

＜連載＞

キーロフ十字架行進(2)・・・・・・伏田 昌義・・ 12P

JIC では、Jクラブ(JIC 友の会)会員を募集しています。
年 4 回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

ジーマのロシア、ウクライナ最新事情

まちを歩いてみれば

トカチェンコ・ドミトリー

JIC モスクワ事務所のスタッフだったジーマ君(現在はタリン大学・大学院生)が、ロシアやウクライナなどの、一味違う旅の情報をお伝えします。最新ファッションや近代的ビルが林立するモスクワ、世界遺産の町サンクト・ペテルブルグ、ウクライナ、バルト三国には新しい名所が続々と生まれています。

自由な空間「ツィフェルブラート」

～モスクワの「時間喫茶」

最近、モスクワに面白いカフェができました。

名前は「ツィフェルブラート」(Циферблат = 時計の文字盤)です。中に入ってみましょう。見た目は普通のカフェに似ています。ただし、ここで売っているのはコーヒーとか紅茶じゃなくて、時間です！

料金は1分=2 ルーブル。

店内に入るとスタッフが出迎えてくれます。

「お名前はなんと言いますか」

「ジーマです」

「ジーマ様ですか。では、イワン・セルゲエビッチという時計を受け取りください」

イワン・セルゲエビッチは、ちょっとお年寄りの感じの時計ですが、かわいいです。うちの祖母の時計みたいです。スタッフは、入口の黒板に入店時間を書きます。19:30。

「ジーマさん！お飲物はいかがですか」

「何がありますか」

「コーヒー、紅茶、ココア、……」

「じゃあ、ココアにします」

数分後、カウンターでココアを受け取りました。クーキーとキャンディーを少しもらい、ココアを持ってテーブルの方へ行きます。今日、私はノートパソコンを持っていて、インターネットでメールを送りたいのです。「ツィフェルブラート」では無線のインターネットが使えます。

あつ、言い忘れましたが、ココアも、クーキーも、インターネットも無料です。私が払うのは時間代だけです。つまり、

私が入った時から出る時までの時間(分)に 2 ルーブルをかけた料金です。

モスクワの人は、私のようにインターネットを使う人もいますが、他に何をしますでしょうか。友達と会ったり、本を読



んだり、食べ物を持ち込んで食事をしたり、ビジネスの話をしたりします。店内では、タバコとアルコールは基本的にだめで、それ以外は周りの人の邪魔をしなければ何をしてもいいです。

これは結構便利だと思います。私もゆっくりしたいときカフェに行くことがありますが、モスクワ中心部にはコーヒー一杯で 200 ルーブルもするカフェが多いです。ツィフェルブラートでは、200 ルーブルで 100 分間過ごすことができます。

ツィフェルブラートはチェーン店です。正式的な名前は、自由な空間・ツィフェルブラート。何故、自由な空間と名づけたのかはわかりますね。そこでは何をするのもそれぞれの人の自由だからです。

最初のツィフェルブラートは昨年モスクワで誕生しましたが、今はモスクワに 3 カ所、ペテルブルグに 2 カ所、そのほか、カザン、ニジニ・ノヴゴロド、ウクライナのキエフとオデッサに出店しています。ツィフェルブラートの成功を真似て、類似の店もできました。

では、2 時間たちましたので帰ります。

出るときに、スタッフにイワン・セルゲエビッチを返して、「会計はいくらですか」と聞きました。

「今 21:30 ですから 120 分です。料金は 240 ルーブルですが、もしジーマ様が、黒板に書いてある詩人の 1 つの詩を暗唱したら、30 分値引きしますよ！」

面白い話ですね。詩を暗唱したら値引きしてもらえるなんて、今まで体験したことがありません。そこで、ダニイル・ハルムスの詩を暗唱しました。スタッフから拍手をもらって、120-30=90 分で、180 ルーブルを支払いました。

モスクワなどで時間があれば、是非、ツィフェルブラートに立ち寄ってみてください！

ノーヴァヤ・ゴランジヤ(新オランダ)

～ペテルブルグ中心部にレトロな新名所

ペテルブルグの中心部、マリインスキー劇場の近くにノーヴァヤ・ゴランジヤという島があります。

まずは島の歴史を紹介しましょう。

300 年前、ピョートル大帝は、創建したばかりのペテルブルグの町で、旧海軍省の近くに船用材の倉庫を建てました。しばらくして、ネヴァ川とモイカ川の間にクリューコフ運河とアドミラルテイスキー運河が作られて、その結果、三角形の人工の島ができました。船用材の倉庫はその島に移されました。倉庫や運河の様子がオランダのアムステルダムに似ていたため、この島は「ノーヴァヤ・ゴランジヤ」(新オランダ)と呼ばれるようになったのです。

1721 年には、この島にロシアで初めての軍港ができました。18 世紀後半には、サッヴァ・チェヴァキンスキーとジャン・バチスト・デラモットという二人の建築家によって、今でも現存している多くの建造物が建設されました。中でも、運河の上にかかっている高さ 23 メートルの赤煉瓦と花崗岩のアーチは特に美しく、この島の建築アンサンブルの中心となっています。アーチの隣には元海軍刑務所の丸い建物が見えます。ペテルブルグ市民は、この刑務所を「瓶」と呼びます。1894 年にノーヴァヤ・ゴランジヤで、偉大な化学者ドミトリー・メンデレーエフの手によってロシア最初の船型試験水槽が作られたことにちなんでいます。



ソ連時代には、ノーヴァヤ・ゴランジヤはレニングラード海軍基地の所有となり、一般人が入れないよう閉鎖されていました。

2004 年にペテ

ルブルグ政府に引き渡されて、島の再建企画募集が行われ、その結果、新興財閥のロマン・アブラモヴィチの会社が再開発を行うことになりました。こうして、2011 年夏に、ノーヴァヤ・ゴランジヤの一部が開かれたのです。

新しい「新オランダ」のコンセプトは、「町の中に町をつくること」です。つまり、もとの倉庫の古い建物を改造して、その中に博物館、画廊、劇場、展示館や教育センターなどを作り、一度入ったら1日中過ごすことができる歴史文化ゾーンを作り上げるのです。再開発が終わるまでまだ時間

がかかりますが、完成した部分が順次、公開されていく予定です。今年7月にこの「新オランダ」を見に行ってきました。

島への入場料はありませんが、入口に警備員がいて、食べ物や飲み物の持ち込みは禁じられています。ノーヴァヤ・ゴランジヤの一番奥には池があります。池は、もとの運河の一部でした。池の隣には小さな市場やレストラン街があります。普通の市場ではありません。近くに大きな菜



園があり、そこで採れた新鮮な野菜がそのまま売られているのです。近くの芝生の上では、羽根突きをしている人

がいました。

イベントのスケジュールをチェックすると、ヨガの練習、自転車ピクニック、アカデミー音楽のコンサートなど、たくさんのメニューが並んでいました。

営業時間は、月～木 11:00～22:00、金～日 11:00～23:00。昨年は6月半から10月までやっていましたが、今年も同じくらいになる見込みです。ノーヴァヤ・ゴランジヤが全面的に完成するのは2017年の予定です。

ボルガ河畔の小さなかわいい町

ゴロジェツ

ゴロジェツ(Городец)は、ヴォルガ川左岸にあるニジニ・ノヴゴロド州の小さな町です。ニジニ・ノヴゴロド市の北西 53km、人口は約 3 万人です。

ロシア語でゴロジェツと言えば「小さな町」という意味ですが、ひとつニュアンスがあります。「小さい」という意味だけでなく、「かわいい」と言う意味も入っています。

なんでこの町にそんな名前が付けられたのか、調べに行ってきました。

ゴロジェツに着いて、バスを降りた途端、「さすが」と思いました。確かに「小さな」町です。中心部はとても小さくて、しかも歩きやすいです。

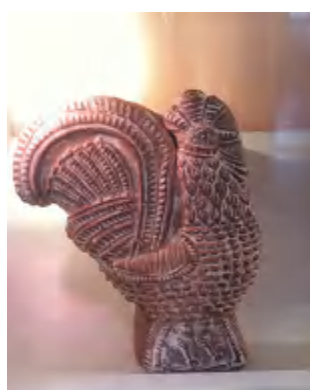
「かわいい」のは、町の建物です。モスクワやペテルブルグにはもうほとんど残っていないロシアの伝統的な建築の家があっちこちに建っています。そして「博物館街」がありました。



一つ目の博物館は、プリアーニクの博物館です。「プリアーニク」は、伝統的なケーキ(ジンジャーブレッド)です。昔のロシア人は、クリスマスのようなお祭りのとき、毎日食べるパンと違って、もっと甘くて蜂蜜や香味料が入ったパン「プリアーニク」を食べました。プリアーニクの歴史的な産地としては、トゥーラやポクロフなどの町が有名ですが、ゴロジェッツも有名です。博物館では、ゴロジェッツのプリアーニクの歴史、製造過程を見学することができます。

次は、サモワール博物館です。サモワールのふるさとと言えば、やはりトゥーラが有名ですが、ゴロジェッツの博物館にも驚くべきコレクションがあります。コレクションの持ち主は、ニジニ・ノヴゴロド州税務署のニコライ・ポリャコフ署長です。

一番印象深かったのは、ゴード・マスチェローフ(作者の町)です。ヴォルガ川の船着場の真ん前に、ロシア的な木造の宮殿が立っています。中では、陶器造りや、木彫り、絵付けなどの体験ができます。



最後に、ゴロジェッツ産の柳欄からできたハーブティーとプリアーニクを味わいました。

この小さくてかわいい町には、絶対行く価値があります！

ゴロジェッツに行く方法は次のとおりです。モスクワからニジニ・ノヴゴロドへは夜行列車が飛行機で行きます。ニジニ・ノヴゴロドからゴロジェッツにはバスが1日に何本か出ています。所要時間は1時間半。

ペテルブルグ・タリン間に新しい電車

今年 5 月末から 1 日一往復で運行再開！

ロシアのペテルブルグからバルト三国をめぐるコースは、いつでも人気の観光コースです。

エストニアの首都タリンは、ペテルブルグから約 400km、一番近いバルト三国の首都です。タリンへ行く方法はいくつかありますが、一つ目は飛行機です。しかし、ペテルブルグ・プルコボ空港までの交通渋滞や航空料金の高さを考えると、ビジネスマン以外には人気がありません。船(フェリー)は普通8時間くらいかかりますが、天気が悪ければもっと時間がかかる旅になります。



最近までの一番人気はバスでした。ユーロラインズ(Eurolines)という会社の、よく整備されたバスが一日7・8本発着しており、選択肢が多いので便利です。ただし、バスにもいくつか不便な点があります。まず、走行時間の7時間をほとんど座ったままいるのはちょっときついです。そして、国境でロシア税関を通過するとき、バスのトランクから荷物をすべて出して行列に立ち、税関の建物に入って審査を受けなければなりません。とくに重い荷物があるときは不便なところです。

2003 年まではペテルブルグからタリンへ電車も走っていましたが、不採算のため運行停止になっていました。最近、ペテルブルグ・タリン間の移動人数が多くなり、今年 5 月 27 日から運転が再開されました。

時刻表は、17:33 ペテルブルグ発、23:28 タリン着です(ペテルブルグはモスクワ時間で、タリンはそれより一時間早い東ヨーロッパ時間)。途中停車駅は、キンギセップ、イヴァンゴロド(ロシア国境)、ナルヴァ(エストニア国境)、ヨフヴィ、ラクヴェレ、タパ。復路は、07:03 タリン発、15:18 ペテルブルグ着となります。

ペテルブルグはヴィテブスク駅(Витебский вокзал)、

タリンはバルト駅(Balti jaam)から電車が出ます。ヴィテブスク駅は地下鉄のプーシキンスカヤ駅/ズヴェニゴロツカヤ駅のすぐ隣で、市内中心部から行きやすい場所にあります。タリンのバルト駅は、世界遺産に指定されている「歴史地区」から歩いて5分です。しかも、駅のすぐそばにホテルがあり、タクシーなどに乗る必要がなく、とても便利です。

電車は、4 つの車両から成り、うち 1 車両は 1 等で他の 3 つが 2 等です。1 等と 2 等の違いは食事の有無です。2012 年 8 月現在で、1 等のチケットは 31 ユーロ、2 等は 26 ユーロですが、乗ってからも 5 ユーロで食事を買うことができます。食事は、水、アイスティーとサンドイッチが入った小さな弁当です。電車の中にはインターネットが付いており、そして 5 ユーロで iPad を借りることができます。

電車の運行再開は、ペテルブルグとタリンの間の経済的、人的関係の拡大を象徴しています。エストニア鉄道の広報によれば、2015 年頃からタリン・ペテルブルグ間を 4 時間で走る特急電車が走るそうです。現在、パスポート審査と税関コントロールは電車の停車中に行われ、それぞれ 40 分ずつかかりますが、将来は、ペテルブルグ・ヘルシンキ間を走っている特急「アレグロ」と同じように、電車が走っている間に審査が行われるようになり、時間節約が進みそうです。

新しい電車でペテルブルグからタリンへ、ようこそ！

ドニエプル川のカーリーナの夏

国際フォーク・フェスティバル



8 月 20 日～25 日、ウクライナ・ポルタワ州のコムソモリスクという町で、「ドニエプル川のカーリーナの夏」(ウクライナ語: Калинове літо на Дніпрі)と題し、第 12 回国際フォーク・フェスティバルが開催されました。

コムソモリスクは若い町です。1960 年に創立され、1972 年に町になりました。住民の大半は、町にあるポルタワ鉞

業濃縮工場の労働者でした。現在の人口は 5 万人くらい。町はちょうどウクライナの中心部に位置し、ドニエプル川のドニエプルゼルジンスク貯水湖の左岸にあります。貯水湖のダムは長さ 35 キロと世界で一番長いダムの一つです。コムソモリスクからわずか 20 キロのところにクレメンチュクという町があります。クレメンチュクの歴史は長く、クラーズという大型自動車メーカーの工場があり、ウクライナ経済で大きな役割を果たしています。近隣には、ポルタワ(110km)、キロヴォグラード(150km)、ドニエプロペトロフスク(180km)といった大きな都市があります。

あちこちに採石場があり、大きな工場の建物やフルシチ



ョフ時代の灰色のアパートで特徴づけられるこの町で国際的な文化イベントが行われるなんて信じられなかったのですが、

フェスティバルは 2000 年に始まり、今年はまだ 12 回目を数えます。

フェスティバルは、ウクライナの独立記念日(8 月 24 日)と重ねて、8 月下旬に行われます。毎年、数ヶ国から参加者があり、これまでロシア、アメリカ、ドイツ、インド、中国、トルコ、タイ、イスラエル、イタリアなど、20 ヶ国以上のアーティストが出演しています。カーリーナ(注)はウクライナを象徴する木のひとつです。カーリーナを歌った民謡がたくさんあります。ですから、フェスティバルの名称には「遙々遠くから私たちの国ウクライナにようこそ！」という意味が込められています。

私は、このフェスティバルに、タリンで所属しているフォーク・アンサンブルとともに参加し、ロシアとウクライナの民謡を歌いました。私たちのアンサンブルには、11 人の演奏家と 12 人の男女歌手がいますが、バスをチャーターして出かけました。今年は 9 カ国のアンサンブルがフェスティバルに参加しました。

5 日間にわたるフェスティバルでは、全国各地から参加したフォーク・アンサンブルが、開会式と閉会式をはじめ、文化会館や野外の舞台に出演し、ストリート・パレードに参加しました。今年は特別に、ドニエプル川の上にも舞台が作られました(写真上)。

その他、市内の聖ニコライ教会で礼拝が行われ、ウクライナの伝統民芸品の展示販売会や、絵画・写真展、花火のショーなどが行われました。聖ニコライ教会で行われた礼拝のあと、それぞれのアンサンブルの何人かが自分の国の歌を無伴奏で歌っていて、その歌は各民族のお祈り

のように、非常に感情をこめた雰囲気でした。コムソモリスク市内の観光もしました。上記の鉱業濃縮工場は特に面白かったです。幅 3 キロ、長さ 7 キロ、深さ 400 メートルぐらい、見渡す限りの広大な採石場。職工服を着て、展望台で記念撮影しました。採掘された鉱石は、ダンプトラックで工場へ運ばれて、加工され、ペレット状にして全世界へ輸出されます。多くのダンプトラックは日本製(日立)で、ペレットは日本へも輸出されています。

フェスティバルに出演する参加者には、コムソモリスク滞在の宿泊代、食事代と市内移動費が無料で提供されます。日本からも参加可能です。参加希望のフォーク・アンサンブルがあったら大歓迎です。

コムソモリスクへのアクセスは、首都キエフから車かバスが便利です。(所要 5~6 時間、距離 300km)。



(注) カリーナ ;
Калина スイカズラ科の落葉低木、ガマズミの木またはその実。秋に白い花を咲かせた後、赤い実をつける。ジャムや果実酒に利用される。ロシア民謡のカリンカはカリーナの愛称。

利用される。ロシア民謡のカリンカはカリーナの愛称。

JIC ロシアセミナー

日露の異文化コミュニケーション

講師 ; 江口 満先生 (創価大学准教授)

日時 ; 11 月 17 日 (土) 13:30~15:00

* 講演会終了後、留学相談会 (~17:00 まで)

場所 ; 新宿スバルビル会議室 (新宿西口)

参加費 ; 無料

* 留学相談をご希望の方は事前予約をお願いします。

主催 ; JIC 国際親善交流センター

申込み連絡先 ; TEL 03-3355-7294

e-mail ; jictokyo@jic-web.co.jp

(タイトル表示 ; 「ロシアセミナー」としてください)

日本とロシアは隣同士の国ですが、まだまだ「お隣さん」という関係になっていません。日本人にとっては、ロシアは何だか遠い国、一方ロシア人にとっては日本料理やアニメが大人気。

江口先生には、異文化コミュニケーションの橋渡し役として、長年、日露同時通訳者として活躍された経験をもとに、日本人とロシア人の共感やすれ違い、国民性の違いなど「隣国交流事情」について、お話しいただきます。皆さんの参加をお待ちしています。

大人気!!

JIC ジェーアイシーのロシア語講座



JIC 東京ロシア語講座 (校期: 10~2月) 途中入講可能!

<入門> 木曜 19:00-20:30

初心者の方を対象にアルファベットから始めて 1 年間かけてロシア語文法を勉強します。

4 月開講の通年コースです。みなさん一緒に楽しくスタートしましょう!

<初級> 火曜 19:00-20:30

ロシア語のやさしい読み物を少しずつ読みながらロシア語に慣れ、会話にも慣れていきます。

<中級> 水曜 19:00-20:30

テキストを使って、身近な出来事などを題材に、ロシア語の表現力を高めていきます。

<時事会話> 金曜 19:00-20:30

新聞・ニュース・物語などを題材に総合的なロシア語力を高めることが目標です。

お気軽に
お問い合わせ下さい!

【JIC 東京ロシア語講座】

受講料: 全 17 回 51,000 円

定員: 1 クラス 4~8 名程度

会場: 国際親善交流センター会議室 (東京・四谷)

<お問い合わせ>

JIC 東京ロシア語講座 TEL: 03-3355-7287

JIC 大阪ロシア語講座 (後期: 10~2月) 途中入講可能!

<入門> 火曜 19:00-20:30

ゼロからのスタート! アルファベットや挨拶をはじめ、ロシア語の基本を勉強します。

<初級> 木曜 19:00-20:30

ロシア語の文法を学びながら、単語だけではなく文章での会話にチャレンジしましょう!

<中級> 金曜 19:00-20:30

文法が身に付いたら会話のパリエーションを増やしていきましょう。表現力もつきます!

<上級> 月曜 19:00-20:30

文法・語彙力・会話力のある方へ。自分の意見をロシア語で表現できるよう訓練しましょう!

【JIC 大阪ロシア語講座】

受講料: 全 15 回 35,000 円

定員: 1 クラス 5 名以上で開講

会場: エル・おおさか (大阪・天満橋/北浜)
大阪府中央区北浜東 3-14 / TEL 06-6942-0001

<お問い合わせ>

JIC 大阪ロシア語講座 TEL: 06-6944-2341

※人数が定員に達しない場合は開講されないクラスもあります。また、すでに人数に達している場合は途中入講できないことがありますので予めご了承ください!!

《本の紹介》

「ロシア極東ハンドブック」

堀内賢志、斎藤大輔、濱野剛・編著、東洋書店刊、
定価 3200 円＋税

JSN(ジャパンシーネットワーク)の濱野剛氏らの企画、編集で、31 人の執筆者により、ロシア極東の政治、経済、社会、国際関係、対日関係などが網羅的に紹介されている。折しも、APEC(アジア太平洋経済協力会議)首脳会議が 9 月にウラジオストクで開催される直前に刊行された本書は、ロシア極東の最新事情を知る格好のテキストとなっている。

■ 本書の問題意識は、前書きの文言によく現れている。「ロシアはいま、急速に『アジア太平洋志向』を強め、その玄関口である極東地域に巨額の国家予算を投じて、大規模な経済開発を進めている。石油・天然ガス開発とアジア太平洋地域に向けたパイプライン・液化天然ガス(LNG)プラントの建設を急ピッチで進め、アジア太平洋への資源輸出を強化している。そして、地域内の道路や鉄道、港湾、空港、あるいは発電所や送電線など、輸送・エネルギー部門をはじめとする産業・社会インフラの大規模な整備が進められている。それは、極東地域をアジア太平洋地域における近代的な産業の拠点、国際トランジット貨物の輸送拠点、経済・文化・学術交流の拠点にしようという一大プロジェクトなのである。」

『『アジア太平洋大国・ロシア』の台頭と極東地域の開発の進展は、日本や中国、韓国、さらには広くアジア太平洋諸国にとって、エネルギー資源の調達やビジネスチャンスの開拓をはじめとする、大きな可能性をもたらすものである。また、外交・軍事面でも大きな環境変化をもたらし、今後のアジア太平洋の平和と安定を考える上でもきわめて重要なファクターとなる。国家レベルではもちろん、企業、自治体、人々のレベルでも、その行方に注目し、どうかかわっていくか考える必要があるだろう。」

■ 本書は、A5 版、資料編も含めれば 360 頁を超す大冊である。ちょっと見ただけで、本を開くのをためらう人もいるかもしれない。しかし、項目がテーマごとに分かれており、一つ一つの項目は 10 頁以内で書かれているので、関心のある部分にだけ目を通せば、実際はとても読みやすい。たとえば、経済・貿易を扱った第 2 章 3 章では、地域経済概観のほか、資源開発、製造業、物流、農業、貿易、中古車ビジネス、水産業、木材産業といった項目が並んでいる。第 4 章ロシア極東の社会では、減少する人口、社会保障制度、住宅事情、教育事情、メディア事情、宗教状況、自然環境と開発が取り上げられる。いずれも過去の経過を

踏まえて最新情報がコンパクトにまとめられているので、ロシア極東を知るには便利な入門書だ。

各項の合間に置かれたコラムも面白い。コラムのタイトルだけを並べてみても、「極東の旧秘密都市」「ロ中国境ツアー」「カジノ特区」「担ぎ屋貿易」「ウラジオの中国製品市場」「右ハンドル車」「ロシア人の海外旅行」「日本語教育事情」「サッカー事情」「ファッション事情」などなど。ちょっと読みたくなるテーマが並んでいる。

■ 筆者にとっては、第 5 章「ロシア極東と日本の関係」が大変参考になった。とくに、「ウラジオストク～日ロ交流史の舞台」(藤本和貴夫氏)、「北方領土問題」(岩下明裕氏)、「北方領土開発」(竹中明洋氏)、「対日観」(権平恒志氏)の各項目は、日露関係の将来展望を考える上で、示唆に富んだ内容となっている。

なお、「ロシア極東観光案内」の項は、弊社の神保泰興君が執筆している。その他、JIC がこれまでお世話になってきた顔なじみの方々が多く執筆されているという点でも、是非一読を進めたい本である。(8 月 8 日/F)

《本の紹介》

「恋に導かれた観光再生」

～奇跡のバリアフリー観光誕生の秘密

中村元著、長崎出版、定価 1400 円＋税

バリアフリー観光推進機構の中村元・理事長から本をいただいた。夕食の合間にパラパラと拾い読みしているうちに、つい引き込まれ、一気に読んでしまった。軽妙な語り口、しかし中身は結構濃い。読ませる本である。伊勢志摩で日本最初のバリアフリー観光の取り組みが始まったいきさつと、そのめざすところを、わかりやすく、また読み物としても面白く書いてある。

「バリアフリー」だから、福祉やボランティア活動の話が中心かなと思って読むと、さにあらず。これは、『地域おこし・町おこし』の話であり、『観光や旅行の新しい形』を提案し、同時に障害者の『普通に楽しく暮らしたい』という希望にしっかりつながっていく話なのだ。私たち旅行業に関わる者にとっても、目を見開かされる指摘や発想が随所であり、とても新鮮で参考になった。

斬新な視点～バリアフリー観光の特徴

① 出発点は、まちづくりの発想

「バリアフリー観光」と聞くと、「かわいそうな障害者のための旅行・観光支援」といったイメージがすぐ浮かぶ。しかし、そうではない。バリアフリー観光が目指すものは、何よりもまず『まちづくり』。バリアフリー観光は、発想の基準を、顧

客である旅行者と(顧客起点)、観光地の住人である市民、それぞれの視点に置くことで、観光振興をはかり地域を活性化させようという取り組みなのだ。

「まちの住民が誇りに思わない観光地に、観光客が集まるわけがない。まちの住民たち、とりわけ観光業を営んでいない人たちが自慢できる観光地こそ、観光客が自然に集まるまちなのである。」(「まえがき」より)

② 高齢化で、誰もがバリアフリーが必要に

では、なぜ「バリアフリー」なのか？ 日本社会は現在、空前のスピードで高齢化している。2010 年 9 月現在の人口推計で、65 歳以上の人口は 2944 万人、総人口に占める割合は 23.1%となり、その後もなお少子高齢化を続けている。高齢化とともに車イスや杖に頼って移動する高齢者は激増する。つまり、国民の誰もが高齢化とともに障害者となっていく社会がすでに始まっているのだ。障害者の問題を、少数の人たちの特殊な問題ととらえるのではなく、社会全体が内包しているきわめて自然で一般的な問題ととらえて、それに対処しようという姿勢がバリアフリー観光にはある。

③ 障害者、高齢者を一つのマーケットととらえる

したがって、障害者のとらえ方も従来とは全く異なる。障害者だって、スキーもしたいし、スキューバダイビングも体験してみたいのだ。雰囲気の良いバーやレストランにも行きたいし、旅行に出かけてその土地ならではの珍味も味わってみたい。そのリクエストの一つひとつ丁寧に答えていくことからバリアフリー観光は始まる。障害者・高齢者を、何かをしてあげる対象としてではなく、それぞれ多様なリクエストをもった旅行者であり観光客として、一つのマーケットとして捉える発想がここにはある。

④ 事業を継続させる仕組み

誰かの犠牲(ボランティア)や、自治体などによる補助に頼っていたのでは、物事は長く続かない。NPO(非営利団体)といえども、最低限の利益をあげ、資金を確保していくシステムを作らなければ、事業を継続させることは難しい。同様に、バリアフリー観光は、それに取り組む旅行社やホテル・旅館、観光施設に利益が生まれるシステムを作ることによって実現する。「バリアフリーは儲かりますよ」という仕組みを作ることが、バリアフリー観光の推進力となる。

バリアフリー観光の現場

伊勢志摩バリアフリースターセンターは、障害者や高齢で身体が不自由な旅行者に、それぞれに合った伊勢志摩の旅行プランや、宿の相談に乗り、紹介や斡旋まで行うシステムを運営する NPO だ。

では、具体的に、障害者や高齢者が観光に出かけるとき、何が一番問題になるのか。まず気になるのは、観光施設や宿泊施設のバリアフリー情報だろう。バリアフリーセン

ターに相談してくる旅行者の大部分はチェアウォーカー(車イス利用者)で、杖使用者なども含めると 95%までが下肢障害者であるという。入口にスロープはあるか、車イスで館内移動できるか、段差はどれくらいか、レストランや風呂はどうなっているか、等々の詳細な情報を求めている。しかし、必要なのはそれだけではない。目的地までのアクセス(交通路)とともに、観光地を面としてとらえた地域内での移動手段、さらに移動中のトイレ情報なども不可欠だ。

大事なのは、ホテルなどのパンフレットに車イスマークが付けられていても、障害者にとっては、それが誰の目で見たらどんな基準なのかよくわからなければ、不安は払拭されないということだ。結局、障害者の不安をなくすためには、「障害を理解してくれる、信頼できる相談者がいること」が必要だということから、センターの設立が構想された。

パーソナルバリアフリー基準

同センターの仕事は、さまざまな障害をもった人や介助ボランティアに専門員になってもらい、観光施設や宿泊施設を調査する「評価基準」を作るところから始まったが、さっそくここで問題にぶつかった

「障害の種類や程度の違うそれぞれが、それぞれに思うバリアフリーの基準を主張するのだ。それは全員が異なっているし、全く逆の場合もある。そんなことを主張し始めたら、たいへんどころか陰悪になる。さらに介助ボランティアのメンバーからは、『バリアフリーとうたうからには、介助できるサポートも必要だし、完全なバリアフリーを実現していなくては嘘になる』という主張も出された。」(本書 99 頁)

評価基準作りの議論は、「バリアの種類が多すぎる」、「完全なバリアフリーは実現できそうにない」という厚い壁にぶつかって、「バリアフリー観光なんてできない」という方向に向かいかけた。ここで、発想の大転換が起こる。それが、「パーソナルバリアフリー基準」だ。

パーソナルバリアフリー基準とは、個々の障害者それぞれに合わせたバリアフリーの基準だ。

「基準とは言うものの、これは一定の数値を定めたものではない。障害者や高齢者のそれぞれの、やりたいこと、体の状態などその人それぞれの事情を判断の基準にして相談に乗るというシステムでありポリシーだ。」(19 頁)

このようにして、伊勢志摩のホテルや観光施設のバリア調査が始まった。障害者本人でさえ忘れがちな事実は、障害の程度やバリアの大きさは、人によって千差万別だということ。車イス一つとっても、障害者自身が操作する自走式車イスもあれば、介助者が押す介助者用車イス、モーターで走る電動車イスと、大きさも重さも違っている。したがって、どんな障害者にも通じる基準は、個別パーソナルなものにならざるを得ないのだ。

バリアフリーアドバイス

伊勢志摩バリアフリースターセンターは、観光・宿泊施設のバリア情報を調査する際、必ず受入施設側の立会人をつけてもらうことにしている。そうすることで、障害者にとって何がバリアになるのか、どんなことを不自由に感じるのか、実感してもらう。そして、ハード面の整備だけでなく、食事やトイレ、入浴など、さまざまな場面で受入側の工夫や介助にアドバイスをを行っている。こうすると、大きな工事をしなくても、ほんのちょっとした工夫で改善できることが多いのだ。「例えば、ベッドの置き方や、エアコンのリモコンの高さ、電話やアメニティーを置く場所などは、変更するだけでいい。あるいはハンガーの高さや、トイレの補助バーの付け替え、浴場のお風呂マットなども、たいした金額はかからない。それらのほんの少しの工夫が、障害者にとっては大きな生活環境の変化になるのだ。」(144 頁)

バリアフリーはハードよりもハート

障害者を専門に扱う旅行社ベルテンポの社長、高萩宗徳氏と中村氏の会話が印象的だ。

「障害者には日本より海外の方がバリアフリーで楽です。最も人気があるのはハワイですね。そもそも高齢者や小さな子ども連れに来てもらおうと、観光のためのバリアフリー化がなされている。でもね中村さん、タイに行ったら、これまた障害者の皆さんに喜ばれたんです」

「えっ！ タイって、歩道はボコボコ穴が空いているし、寺院の入口には長い階段や、大きな敷居があって、健常者にとってもバリアだらけじゃないですか」

「そうなんです。ところが、車イスで行けば、そのあたりにいる人だれもが当たり前のように手伝ってくれるんですよ。それこそ、花輪を押し売りしているおばちゃんとかが、自然に手伝いに来てくれるんですよ。ハード的にはまったくバリアフリーじゃないけれど、人によってバリアフリーになっている。しかも多くの場合、その方が障害者の喜びは大きいんです」(54-55 頁)

バリアフリーはハード整備ではなく、人のハートと行動だけでも十分なし得られる。するとまったくバリアフリーじゃないお店や旅館でも、店員が満足のいく介助をすれば、それはバリアフリーであるということである。

発想は同じ！「オーダーメイドの旅」

バリアフリー観光の基本である「顧客起点」。その中で確立された「パーソナルバリアフリー基準」という考え方は、私たちがロシア専門旅行社として日々取り組んでいる旅行手配(とくに個人旅行手配)と発想は全く同じだ。つまりは、お客様の希望にそった「オーダーメイドの旅」を提供し、実現するということに尽きる。

ロシアという特殊な地域を扱っている関係で、私たちが取り扱っている旅行手配は、グループであれ個人であれ、パッケージであれ手配旅行であれ、ある程度オーダーメイドなものにならざるを得ない。というか、本来、旅行や娯楽とは、個人的楽しみに発するものであり、オーダーメイドなものなのだ。ロシア旅行する人も、その関心は千差万別。ロシアのバレエや音楽に関心のある人もいれば、ロシア語学習者もいる。航空ファンもいればサッカーファンもいる。それらの関心に応えるために、可能な限り情報を集め、最適の組み合わせを提案し、旅行を演出するのが私たち旅行社の役割なのだと改めて思う。

ユニバーサルツーリズム

同時に、バリアフリー観光は、旅行業界でも「ユニバーサルツーリズム」の名称で、すでに取り組みが進められている。週刊トラベルジャーナル誌に、「実践ユニバーサルツーリズム・超高齢社会の旅の窓口」と題したシリーズ記事が、この 4 月からほぼ月 1 回のペースで掲載されている。それを読むと、障害者や高齢者、あるいは何らかの病気を持った人の旅行を手配するためには、やはりそれぞれ個別の専門知識が求められる。例えば、空港での車イスの利用案内、聴覚障害者のためのコミュニケーションカード、注射器や医療機器の航空機内持ち込み、食物アレルギーの人のための特別食など、今後増えていくであろう障害者や高齢者の旅行手配に備えて、私たちもまた必要な情報と知識を蓄積する必要がある。

しかし、大事なことは、「ツアー参加は難しい」と頭から考えず、「どうしたら参加してもらえるか」という視点で、可能な方法を探すことだ。そのためには、旅の目的、希望日程、身体の状態、同行者など、諸条件をしっかりと確認し、お客様とともに旅行を作り上げていく姿勢が求められる。

仕事は楽しくやらなければ続かない

最後に、本書を読むと、「おでかけ！チェアウォーカー」(車イスの人のための伊勢志摩マップ)、「どこでもチェアー」(伊勢志摩の域内に配置されたレンタル車イス)、「ばりふりお伊勢さん」(伊勢神宮参拝を介助するボランティア活動)、「三重で遊んで！」(中尾ミエさんを起用した三重観光コマーシャル)など、ネーミングの妙が随所に紹介されている。

仕事は楽しくなければ続かない。これは、非営利の NPO 団体だけでなく、会社であっても同じだ。

内容を的確にわかりやすく表現する技術、楽しくやる気を引き出す工夫、それぞれ異なる関心や利害をもった関係者を一つの方向にまとめ上げる話術。本書からは、著者である中村元さんの人柄と魅力もおのずと滲み出してくる。(8 月 6 日/F)

高速ツアーバス事故 旅行業の一断面 (2)

訪日外国人旅行の光と影

関越自動車道バス事故を起こしたバス会社「陸援隊」は、中国や台湾からの外国人観光客向けのバスを主に運行していた。東日本大震災で外国人観光客が激減したために、高速バスの運行にも手を伸ばしたと報道された。

実は、バス事故を起こして逮捕、起訴されたK運転手は、自分のバスを4台持ち、「陸援隊」の名義を借りて、日常的に中国人観光客向けツアーを手配し、自分のバスを走らせていたのだ。中国出身の同運転手は、得意の中国語を生かして現地の旅行社と直接やり取りし、中国人観光客を成田空港までバスで出迎え、滞日中は運転手兼ガイドとして同行し、大阪などへの遠距離運行も行っていた。このような関係で、K運転手は、陸援隊から電話などで単発の仕事を頼まれると、「日雇い運転手」として、同社のバスを運転するようになったという。



関越道での大事故(高速ツアーバス)

ここには日本の法令上、いくつもの違反が見受けられる。正規の営業許可を持たずにバス事業を行う「無許可営業」=いわゆる「白バス」営業は道路運送法違反だし(「日雇い運転手」も同法違反)、同運転手がガイド行為を行っていたとすれば通訳案内士法に違反する「無資格ガイド」でもある。

ツアーオペレーター業務

ところで、K運転手が中国や台湾から観光客を受け入れて訪日旅行の手配をしていたことは、旅行業法違反ではないのか。旅行業は登録免許制だが、旅行会社でない者が旅行の手配を請け負い、実施することは法律上許されているのか。答えは、残念ながら法律違反ではない。

ツアーオペレーター業務(またはランドオペレーター業務)というものがある。たとえば、日本の旅行会社が、旅行者のために海外旅行の手配を行う場合、海外のホテルやバス会社と直接連絡して手配することは稀で、ツアーオペレーターと呼ばれる現地手配を専門に行う会社に委託して手配を行うのが一般的だ。ツアーオペレーターとは、旅行会社が販売するツアー商品の素材となるホテル、バス、鉄道、ガイド、レストランなどの予約手配を行う会社である。外国の旅行会社から依頼を受けて、日本国内の旅行手配を行うのも、同じくツアーオペレーターの仕事だ。旅行会社といっても、外国のすべての国の観光事情に通じているわけではなく(実際にはほとんど通じていないため)、現地事情に詳しい専門のツアーオペレーターに委託しないと効果的かつ円滑な旅行手配ができないのだ。

ツアーオペレーターの業務は、基本的に旅行会社との会社間取引であり、消費者である旅行者と直接取引をしないので、日本の旅行業法では旅行業登録は不要であるとされている(消費者保護のためには、旅行者と直接取引する旅行会社だけを規制すればよく、会社間取引を行うツアーオペレーターは規制する必要があるというのが国土交通省・観光庁の考えだ)。ツアーオペレーターは、実際にはさまざまな旅行手配を行い旅程管理も行う旅行会社でありながら、日本の法律上は旅行会社とは扱われておらず、何の法的規制も受けていないのだ。

ここにも、前回見たように、実際には「路線バス」でありながら、それに「旅行商品」という名目を与えて「高速ツアーバス」を走らせてきたのと同じ、日本の奇妙な観光行政の実態が垣間見える。

民族系ツアーオペレーター

「旅行業は、机一つと電話一本あればできる」と昔から言われてきた。

日本人であれ、中国人であれ、海外に飛び出した人が、難しい技術を要さずに外国で手っ取り早くできる仕事といえ、自国人を相手にする商売だ。そこで思いつくのが、料理店や旅行業。自国の知り合いや旅行会社の委託を受けて、現地でホテルやレストランの予約を代行し、到着したお客を出迎えたり案内したりして稼ぐ。ツアーオペレーター業務やガイド業務は、ほとんど自然発生的にどこでも行われてきたし、現に行われている。留学生が、帰国後にツアーオペレーター会社を開業する場合もあるし、留学先に留まって会社を興す場合もある。要は、言葉ができて、現地事情に詳しければ、誰でもできるのがツアーオペレーター業務なのだ。

そして日本では、このツアーオペレーター会社は、旅行会社としての法的規制を何一つ受けない。K運転手のように母国とのつながりを生かしてツアーオペレーター業務を



伊勢神宮を訪問したロシア人観光客

行う外国人(個人)や外国資本会社は無数にあり、通常のツアーオペレーター会社と区別して「民族系ツアーオペレーター」と呼ばれている。

もちろん、訪日外国人観光客の受入業務には、旅行業法に基づいて登録された旅行会社や日本のツアーオペレーター会社も積極的に取り組んでいる。しかし、日本では、旅行会社が取扱う訪日外国人の数は全体の 10%程度、その取引額は旅行社全体の売上の 1~2%に過ぎない。東南アジアを中心とする民族系ツアーオペレーターが訪日外国人旅行市場をリードしてきたというのが実情だ。最近では、香港や台湾など海外の旅行会社が、日本の旅行業者やツアーオペレーターを介さずに直接日本の宿泊や交通、食事などを手配する「直手配」も進んでいる。

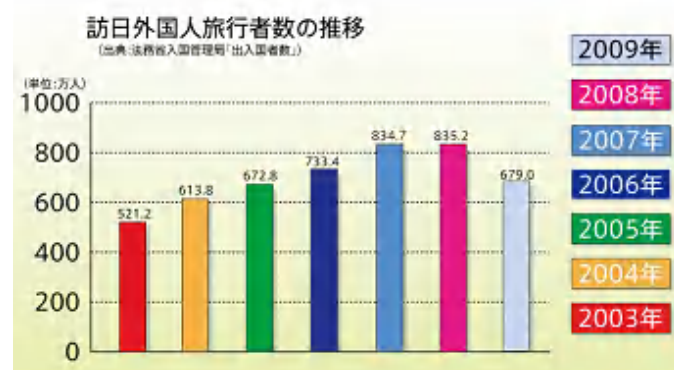
「観光立国」～訪日外国人 3000 万人計画

2010 年 6 月に閣議決定された「新成長戦略」では、7つの成長分野の一つとして「観光立国・地域活性化」が掲げられており、観光産業は 21 世紀のわが国を支える成長産業と位置づけられている。2003 年から始まったビジット・ジャパン・キャンペーン(VJC)では、「2010 年までに訪日外国人を 1000 万人」とする目標が打ち出された。2010 年の訪日客は 861 万人と目標達成まであと一息に迫ったが、東日本大震災と福島原発事故で昨年は 621 万人に落ち込んだ。しかし、「2020 年までに訪日客 2500 万人、将来的に 3000 万人をめざす」とした 2010 年の新しい目標は掲げられたままだ。

率直に言って、訪日客 3000 万人という政府の目標は、民族系ツアーオペレーターと無資格ガイド(注 1)を黙認し、その力を借りて実現することが前提とされている。3000 万人というのは、そうでもしなければ達成しようのない数字だ。

しかし、何ら法的規制を受けないツアーオペレーター会社、とくに民族系ツアーオペレーターをこのまま放置して

いていいのだろうか。規制がない以上、どんなにひどい旅行手配でも許される。高級ホテルと偽ってビジネスホテルにお客を泊めても、安全管理が不十分なバスに乗せても、粗末な食事を出しても、ガイドがいい加減な説明をしても、旅行業法や消費者保護法の規制を受けることはない(もっとも、ひどいことをやり過ぎると、発注元の旅行社から契約を打ち切られる恐れはあるが)。実際に、これら民族系ツアーオペレーターが手配する訪日旅行では、無資格ガイドが案内につくのは日常茶飯事だし、手数料を稼ぐために観光地めぐりはそこそこにして土産物店を 5 軒も 6 軒も連れ回すといった悪例がよく指摘されている。



高速ツアーバスが規制緩和で生まれ、安全管理がなごりにされて今回のような大事故を引き起こしたように、法的規制を受けないツアーオペレーターによる訪日旅行手配が、今後、同様の大事件や事故を引き起こす可能性はないとはいえない。悪質な民族系ツアーオペレーターやそれを使った外国旅行社が叩かれるだけならまだしも、外国人観光客がからんで大きな事故が起こった場合には訪日旅行の信頼性そのものが大きく揺らぎかねない。

外国人観光客を保護し、訪日旅行商品を高品質化するために、訪日外国人客を取り扱うツアーオペレーター業務にも、旅行業法に準じた法規制が求められている。

注1;無資格ガイド

通訳案内士法では、「国家試験に合格した通訳案内士だけが、通訳ガイドを名乗ることができ、外国人観光客のガイド業務を行うことができる(業務独占)。違反者＝無資格ガイドには最大 50 万円の罰金を科す」と規定されている。しかし、この法律は実際には守られていない。法施行以来、無資格ガイド行為で摘発され罰金を科された者は一人もいない。逆に、訪日客 3000 万人実現のためにはガイド不足が明らかなので、「通訳案内士以外の通訳ガイド」を容認する方向で制度改革が検討されている。ここにも「規制緩和」の流れが見られるが、果たしてそれがよい結果をもたらすのかどうか、議論のあるところだ。

伏田昌義(ジェーアイシー旅行センター株式会社)

キーロフ十字架行進(2)

信仰の道を歩く

伏田 昌義

「ダニよけスプレーも買っておいの方がいいよ。オレンジ色の缶のスプレー！」とリュドミラさんは言った。6 月 1 日の午後、モスクワのリュドミラさんの会社を訪ね、翌日のキーロフ行き列車のチケットを受け取ったときのことだ。

事前の連絡では、長靴、雨合羽、寝袋、敷きマット、防寒用上着、洗面具などのほか、食事用の深皿とコップ、スプーン、フォーク、ナイフは必携と聞いていた。食糧は各自が持ち寄るが、一緒に歩く友人たちのために、日本からインスタント味噌汁を 50 個ほど持ってきてほしいとのリクエストを受けていた。私は、味噌汁以外はモスクワで調達するつもりで、たいした食糧を持ってきていない。私と一緒に歩く予定の通訳兼アシスタントのジーマ君は、まだ長靴を買っていないと言う。早速、2 人でスーパーマーケットに買い出しに出かける相談をしていたら、リュドミラさんから冒頭の言葉が飛んできた。

シベリア・ダニ

中央ヨーロッパからロシア西部、シベリア、極東の森林・山岳地域では、「ダニ媒介脳炎」という怖い病気がある。これはある種のダニに噛まれることにより感染し、中枢神経を侵される病気で、発熱をともなう頭痛や嘔吐などの症状を呈する。ひどい場合には昏睡、痙攣、身体麻痺などを引き起こし、重い後遺症を残す。オーストリア、ポーランド、チェコ、ハンガリー、ウクライナ、ベラルーシ、ロシアなどで、毎年、5000～6000 名の発症例が報告されている。日本でも「ツツガムシ病」という類似の病気があるが、ロシアのダニ媒介脳炎は、それよりかなりタチが悪い。

厳密に言うと、ダニ脳炎には 2 種類あって、中央ヨーロッパダニ脳炎とロシア春夏脳炎とに分かれる。ロシア春夏脳炎はシベリアと極東地方に発症するダニ脳炎で、中央ヨーロッパダニ脳炎が致死率 1～2%なのに対して、こちらは 20～30%と高い。きわめて危険なダニ脳炎だ。

キーロフはウラル山脈の西側だからシベリアではないよね。中央ヨーロッパだよね、……。

ちょっと心配ではあるが、ロシアでの毎年の発症例は数千人程度だから、交通事故に遭う確率よりはかなり低い(と自分に言い聞かせる)。ダニ脳炎の唯一の防止策は、ダニに噛まれないことだ。というわけで、オレンジ色のダニよけスプレーを探してみたが、モスクワでは結局見つけることができなかった。仕方がないので、キーロフで仕入れる

ことにする。

キーロフ行きの列車

6 月 2 日夕方 6 時半、モスクワのヤロスラブリ駅のホームでリュドミラさんと待ち合わせた。

ロシアの鉄道駅には改札口というものがなく、駅のホームまでそのまま入っていける。客車ごとの入口に車掌さんが立っていて、乗車チケットのチェックを受けてから乗り込



ヤロスラブリ駅にて

贅沢なしきたりは、ソ連が崩壊して資本主義ロシアになった今日でも全く変わっていない。

同行のジーマ君とともに、20 輦以上の客車をつないだ長大な列車の号車番号を見ながらホームを歩いて行くと、ちょうど中ほどの客車の入口でリュドミラさんとその友人・セルゲイ氏が待っていた。列車に乗り込む客は誰も彼も大きなリュックを担いでいる。皆、キーロフ行進に参加する人たちのようだ。

ご存じのとおり、ヤロスラブリ駅はシベリア鉄道の始発駅(終着駅)だ。シベリア鉄道は、モスクワからウラジオストクまで全長 9000km の世界一長い鉄道だが、私たちがめざすキーロフは、そのシベリア鉄道の途上にある町なのだ。モスクワから北東に約 900km。モスクワを 18:50 に出発する列車は、ウラジミール、ニジニ・ノブゴロドを経て、翌朝 07:30 にキーロフに到着する予定だ。

4 人コンパートメントの客車は新型車両で、とてもきれいだ。シベリア鉄道といえば、ちょうど 30 年前にイルクーツクからモスクワまで 3 泊 4 日の列車旅をしたことがある。左右に 2 段のベッドがあり、中央の窓際にテーブル、下段ベッドの下は荷物入れ、上段ベッドの通路側にも荷物を置くスペースがあるのは昔と同じだが、窓の上の壁に液晶テレビがついており、上段の荷物置き場にセイフティボックスがある点が違っている。各ベッドに置かれたタオル、歯磨きセットが昔より垢抜けているのは当然としても、何よりも大きな違いは、車両両端にあるトイレの清潔さだ。昔の「垂れ流しトイレ」は姿を消し、最新式のバキュームトイレに変わっているのには感動した。トイレ使用中のランプが通路端についているのも、日本では当然と言えば当然なのだが、ロシアでは新鮮に感じてしまう。

む仕組みだ。車掌さんはほとんど女性で、一車輛につき 1 人(長距離の場合は 2 人)の車掌さんが管理するという、このロシア鉄道の

列車の設備は 30 年前に比べると格段に良くなったが、スピードはほとんど変わっていない。時速 70km から 80km のスピードで列車は、ゆっくりと走る。

語学センターの経営者、セルゲイ氏

セルゲイ氏は、身長 190cm 近い長身で、がっしりした体格の 50 歳代男性。その体格に比例してもものすごく巨大なリュックサックをコンパートメントに担ぎ込み、ベッドの下に押し込もうとしている。迷彩服のズボンにくるぶしまであるしっかりした登山靴。きびきびした動作。アウトドア活動に慣れた頼もしさを感じる。

リュドミラさんによれば、彼はモスクワで 30 以上の言語を教える「語学センター」の経営者だ。息子さんは英語、フランス語など 4 カ国語の同時通訳者で、プーチン、メドベージェフの通訳も務める語学の達人。リュドミラ



さんの会社の得意客の一人で、旅行の世話をするうちに親しくなり、今回、キーロフ行進にも誘ったのだという。彼女によれば「まだ行き先が決まってもいないのに、旅行代金を前払いしてくれる気前のよい人」なのだそうだ。

今回キーロフで宿泊の世話をしてくれるジーマ氏夫妻も、リュドミラさんの会社を通じて 5 年ほど前に日本へ旅行をしたのがきっかけで意気投合したのだという。旅行の手配をした翌年にジーマ夫妻が今度は彼女をキーロフ十字架行進に誘い、5 日間一緒に歩いて一層仲良くなった。リュドミラさんに限らずロシア人はとてもあけっぴろげで、親しくなるとトコトン仲良くなるところがある。人づきあいが悪く、話し好きでもない私から見ると、彼女は天性の「営業ウーマン」で、有力顧客をたくさん持つやり手の経営者だ。リュドミラさんの会社は日本専門の旅行社ではあるが、もう一方では、セルゲイ氏やジーマ氏のようなお金持ちの顧客に誘いかけて、インドやチベット、中南米など世界各地に旅行グループを送り出している。

有力顧客をつかみ、客の要望に応じて世界中どこでも旅行を手配して、自らも添乗員として一緒に旅行してさらに客層を広げていくというのは旅行会社の一つの典型的なやり方なのだが、自分にはなかなかできない芸当だ。だから、ロシアに特化した専門旅行社という方向を選んだわけではあるが、リュドミラさんを見ていると、自分の足りないところばかり気付かされいつも反省させられる。

短い夜

セルゲイ氏、リュドミラさん、ジーマ君と私の 4 人で、小さなテーブルを囲み、リュドミラさんが買ってきてくれたピロシ

キで夕食をとる。野菜(キャベツ)と魚肉と果物(チェリー)の特大ピロシキが 3 つもそろっている上に、セルゲイ氏がサラミソーセージを大きなサバイバルナイフで切り出してくれるから、半分も食べないうちにもう満腹。しかし、セルゲイ氏は当然のごとく、小さなコニャックの瓶を取り出し、「さあ、一杯!」と差し出してくる。瓶のキャップで回し飲みをしながら、ピロシキを無理にでも胃袋に押し込む。こうしてキーロフにむかう列車旅の夜は更けていった。

「夜は更けていった」はずなのだが、もう乗車してから 3 時間近くたつのに、窓の外は相変わらずモスクワで乗り込んだときと同じ明るさだ。6 月は太陽がもっとも北に上がる時期。北極圏では白夜の季節だ。モスクワの緯度はそこまで高くないが、夜 10 時を過ぎても外は十分に明るい。11 時近くになってようやく薄暗くなり、短い夜が訪れた。明日は行進の初日、20km ほど歩かねばならない。寝不足は禁物だ。ベッドに身を横たえたが、ガタン、ゴトンと揺れる車輦にしばしば眠りを破られる。ふと目を覚ますと午前 2 時半、外はすでに明るくなっている。3 時半になると地平線の向こうからオレンジ色の太陽の光が力強くのびてきた。

同行者がそろう

6 月 3 日午前 07:30、列車は定刻にキーロフ駅に到着した。小雨が降ったのか、ホームのところどころに小さな水たまりがある。曇天。外気は 12-13 度か、かなり涼しい。リュド



右からキーロフのジーマ氏、リュドミラさん、同行のジーマ君

ミラさんの顧客であり友人であるジーマ氏が車で出迎えてくれる。フォルクスワーゲンの 7 人乗りワゴン車でジーマ氏のアパートに向かう。

アパートの部屋の一角には、ジーマ夫妻が買い揃えてくれたペットボトル入りの水や携帯ガスバーナー(湯沸し)、缶詰、インスタント食品などが山と積み上げられている。ダニよけスプレーもある。

担いできたリュックを開け、各自が持ち寄った荷物を一度出して、ジーマ氏のアドバイスに従って持っていくもの、持っていけないものに振り分ける。荷物を軽くするために、衣類、寝袋、その他の必需品を厳選し、空いたスペースに食糧と水を詰め込んで、各自分担して持つ。

セルゲイ氏はリュドミラさんからよほど「道なき道」の悪路を歩くと聞かされていたらしい。大きなリュックから、大量のインスタント・カーシャ(粥)、携帯ガスバーナーとともに、斧

やノコギリが出てきたのには驚いた。もちろん、ジーマ氏のアドバイスに従って不要な「大工道具」はアパートに置いて行った。食糧と水の半分は 3 日後にジーマ氏の部下が中間地点まで車で運んでくれるとのこと。助かった。それでもリュックに入りきらない食糧は小さなバッグに入れて持つことにした。

キーロフのジーマ氏は 40 歳くらい。小柄だがスポーツで鍛えた精悍な体つき。キーロフ市内で 2 つのレストランを経営するビジネスマンだ。奥さんのスベトラーナさんは、新聞、雑誌などの出版社勤務。小柄な美人だ。イリヤ君(14 歳)、ニキータ君(10 歳)の二人の息子と、スベトラーナさんの同僚(エカテリーナさん)を加えた 5 人が今回のジーマ・チームの陣容だ。一方、リュドミラ・チームは、私とジーマ君、セルゲイ氏、そして前日からキーロフに来ているはずのユーリー氏(リュドミラさんの高校時代の先生)の 5 人。合計 10 名でキーロフ行進の間、行動を共にすることになっている。

実は、あとで知ることになるのだが、行進の同行者はもっと多かった。ジーマ氏のレストランのシェフ、アンドレイ氏とジーマ氏の幼馴染みのロマン氏らもそれぞれ子供連れで参加していたのだ。お互いに休憩地で休む場所を毎年同じ場所に決めているようで、休憩地に着くたびに前に見た顔に会うので不思議に思っていたら、何のことはない、皆友人同士だったのだ。

朝食を食べ、荷造りが終了したら、早速アパートの外に出てジーマ一家の準備ができるのを待つことにする。リュドミラさんが、オレンジ色のスプレー缶を取り出して、皆を呼び集める。足元の靴からズボン、上着、帽子と、顔以外の全身にスプレーを振りかける。靴とズボンの裾には特に念入りに振りかけ、ついでにリュックサックにもスプレーする。シベリア・ダニは足元から這い上がってくるのだ。

スプレーの臭いは独特で、かなりきつい。日本で買ってきた虫よけスプレーもよく似た臭いなので、成分は近いのかもしれないが、オレンジの鮮やかな地に黒々と大きなダニの図柄がついたロシアのスプレーの方が何倍も効果がありそうな気がして、体中に振りかけてもらった。

待つうちに、エカテリーナ(愛称カーチャ)さんが夫に車で送られてやってきた。ほどなく、ジーマ夫妻と二人の息子たちが下りてきて、全員がそろそろ。出発地点である聖トリフォン修道院へと歩き出した。

聖トリフォン修道院

修道院の入口に到着すると(10:20)、十字架行進がちょうど始まったところだった。十字架と旗を先頭に、人々が次から次へと溢れるように歩き出てくる。数千人の人々が歩く道路の端を逆行して修道院の中に入る。随分たくさんの人々が出て行ったはずなのに、修道院の中にはまだ多く

の人々が残っており、あちらこちらで話をしたり出発の準備をしたりしている。

修道院で、もう一人の参加者、ユーリー氏と合流した。リュドミラさんの高校時代の先生なので、私も敬意をこめて、ユーリー・セルゲービッチ先生と呼ぶことにする。年齢は 70 歳代前半。豊かな髭をたくわえた仙人のような風貌。ロ



シア正教でいう「隠遁者」というのはこういう人かと思ひながら、その所作を観察する。歩きながら、ときどきゆったりした動作で腕を上げ、体の前で十字を切る。聖書の一説を暗唱しているのか、口の中

で何か小さな声で呟いている。目が合うとにっこり笑う笑顔がとても無邪気で人なつこい。高校ではさぞかし人気のある先生だったんだろうなと思う。

全員がそろったところでさあ出発と思いきや、まだまだジーマ氏とリュドミラさんの号令はかからない。みんなどんどん修道院の敷地の奥へと進んでいく。出発前にまだやることがあるようだ。

まずは、修道院の裏手回って、そこに湧きだしている「聖なる水」を両手に受けて顔を洗い、心を清める。次いで修道院の中に入る。薄暗い部屋のあちこちにイコン(聖画像)が掲げられ、ロウソクの火が揺らめいている。イコンの前で祈る人、細長いロウソクに火をつけて供える人、イコンを覆うガラスに口づけしている人もいる。静かで厳かな空気が流れる。私もイコンの前で日本式に両手を合わせ、「これから十字架行進を始めます。無事に最後まで歩き通せますように」と心の中でつぶやく。

一通りのあいさつを済ませて、全員で記念写真を撮ってから修道院を出発した時には 10:50 になっていた。

先頭から 30 分ほど遅れてゆっくりと歩く

リュドミラさんによれば、今年のキーロフ行進の参加者は 3 万人以上。先頭集団について行くと人ごみに揉まれて歩きにくい上に、仲間からはぐれて迷子になりやすいので、ジーマ家では先頭集団が出発してから 30 分～60 分後にゆっくりとついて歩くことにしているそうだ。なるほど、もう先頭が出発してから 30 分以上たつが、前後左右にはまだたくさんの人が、三々五々、小さなグループを作って歩いている。

歩き出しは誰でも元気一杯、つい口数も多くなるようだ。リュドミラさんは、ユーリー先生やセルゲイ氏としきりに話しながら歩いて行く。一番小さなニキータ君がスベトラーナさんと手をつないで、まわりつよく歩いている横からカ

ーチャさんが何か話かけている。ジーマ氏はといえば、初めてこの町を訪れた私のために、この建物は銀行、あれはカザン聖堂と、あれこれ説明しながら歩いてくれる。

やがて道は市街地を通り抜け、郊外へと続く広い道路に出た。長い橋を越えてビャートカ川を渡るころには、先を行く人々のうしろ姿がどこまでもつながっているのがよく見えてくる。もう 30 分は歩いたのだろうか。肩にリュックの重さが食い込んでくる。簡易舗装の広い道はどこまでも伸びている。空が晴れ、太陽の日差しが降り注ぐ。気温が上がり、汗ばんでくる。

約 1 時間半歩いて、最初の休憩地トリニティ修道院に到着した (12:15)。敷地内は人で溢れ返っている。わずかに残った草地にマットを敷き、腰を下ろす。さっそく昼食の用意。ジーマ氏とセルゲイ氏がバーナーで湯を沸かす。スベトラナさんとカーチャさんがキュウリやトマト、サラミソーセージを並べる。リュドミラさんがインスタント麺のカップやパンを取りだす。カップ麺かと思いきや、これがインスタント・ポテトだった。湯を注ぐだけで、マッシュポテト (mashed potato) ができあがる。バター味がきいて結構いける。安藤百福翁が発明した即席めんは、ロシアにも浸透し、次々と新しいメニューを生み出しているようだ。

行進はまだ始まったばかりだ。ちょっとしたピクニック気分で、昼食を分け合い、たっぷりと休憩をとる。

13:30 になった。野太い祈りの声が響き渡り、修道院の鐘が乱打される。カランコロン、キンコンキンコンが交じりあい、軽快に鳴りつづける音のシャワーの中で、十字架と聖ニコライのアイコンが動き出し、行進が再開された。先頭から 20 分ほど遅れてわがジーマ隊も出発。鐘はまだ鳴りつづけている。



あらゆる人々が歩く信仰の道

トリニティ修道院を出てほどなく広い道路からはずれ、細い田舎道に入る。木造の家屋がまばらに点在する村の中を縫うように、曲がりくねった赤茶色の地道が続いている。1 時間も歩いたのだろうか。大人 5 人のリュドミラ隊は、子連れのジーマ隊よりかなり先に来てしまったようだ。民家の塀の根元に座り込んで小休止。水を飲みながら、ジーマ隊を待つ。

休憩している私たちの前を、次から次へとリュックを背負った人々が通り過ぎていく。キーロフ十字架行進に参加し

ているのはどんな人たちなのか。あらためてじっくり観察してみる。

小学生くらいの女の子を連れた男性がゆっくりと歩いてくる。女の子はしっかりと父親の手を握っている。

頭をスカーフでおおった女性の集団がいる。皆一様に



丸めた敷きマットをリュックにくくりつけている。

緑や茶色の迷彩服に身を包んだ若者たちが軽快な足どりで追い越

していく。聖書の一節か、ときどき何やら交代で暗唱している。歌を歌っている一団もある。

2〜3 歳の幼児を乗せたベビーバギを押して若い母親が通り過ぎる。子どもは揺られて眠っている。

年配の婦人とその娘が手をつないで歩いてくる。首から小さなアイコンをペンダントのように下げている。足元は 2 人とも素足だ。白い足がまぶしい。

老人が、杖を突いて行く。大きなリュックを担いでいる。ゆるゆる、よろよろと、追い越されながらも歩いていく。

大きな額縁に入ったアイコンを胸に掲げて行く女性。太り肉が逞しい。祈りの言葉を朗読してはときどき頭を上げ下げしながら通り過ぎる。

若者、中年、老人、子供、女性、男性、あらゆる年齢層が入り混じっている。普段はごく普通の市民なのだろう。しかし、ここでは誰もが何かにすがるようにして、敬虔な顔をして歩いているように見える。歩くことによって精神が浄化されるのか、あるいは信仰の力が人の心を清浄にするのか、おそらくその相乗作用だろうが、このキーロフの道は特別な道だと思いながら人々の顔を眺めつづけた。

あらかじめ決められている休憩地と休憩時間

キーロフ行進には 1 時間半から 2 時間歩くごとに、1〜2 時間の休憩がプログラムされている。大規模な集団で一定の距離を一定の時間内に一斉に歩くキーロフ行進と、個人または数人程度の小グループで距離も時間もコースも気ままに歩く四国遍路では、比較すること自体に無理があるのだが、私がこれまで経験してきた遍路歩きとは随分違う。

四国では私の場合、歩行距離を稼ぐために、1 時間に 1 回、10〜20 分程度の小休憩をこまめにはさんで早朝から夕方まで歩いた。長く休むと体が緩んでかえってあとが苦しくなるから、休憩時間はできるだけ短くした方がよいというのがガイドブックの助言だった。歩行時間は朝 7 時から

夕方 5 時ごろ(夏場は朝 5 時から)まで 10 時間(12 時間)程度。夕方、宿に着いたらすぐ風呂に入り、夕食を食べて、夜 8 時か 9 時には寝てしまう。睡眠をたっぷり取って、ひたすら歩いた。道が整備され、いたる所に自動販売機や食事処があり、休憩や宿泊の場所が確保できる日本だからこそできる歩き方だ。

しかし、キーロフではこのスタイルは通用しない。何よりも人が多すぎるし、途中の村や原野には食事とか休憩の施設はほとんどない。したがって、1 日の移動距離とコースから逆算して、休憩地と休憩時間があらかじめ決められているのだ。万単位の大集団の歩行移動を混乱なく進めるためには、こうするしかないだろう。



このキーロフのスタイルを体が理解するのに 1 日かかった。おかげで初日はテンポが狂って、歩行距離が短く休憩時間が長いにもかかわらず、午後遅くなると足取りが鈍ってきた。しかも、背負っているリュックは当然のことながら四国遍路よりも相当重く、10kg は軽く超えている(もっと

もセルゲイ氏のリュックは 20kg 以上ありそうだが)。前夜の夜行列車での寝不足も手伝って、キーロフ行進初日は予想外に辛いものになった。

疲れを倍加させる雨中の行進

疲れに拍車をかけたのは雨だった。夕方 17:30 にこの日 3 回目の休憩をとった。1 時間ほど休憩して再出発するはずだった。道端の草むらにマットを敷き、腰をおろして 5 分もしないうちに、急に冷たい風が吹き過ぎ、空が暗くなって、大粒の雨が降り出した。あわててマットをしまい、リュックを背負って雨具をつける。雨がバラバラと勢よく降ってくる。雨合羽を雨水が伝う。皆、リュックを背負ってじっと立ったままだ。行進はまだ始まらない。先頭の十字架とアイコンが動き出さないと皆歩けないのだということ、そして先頭は決められた時間にならないと動き出さないということをここで初めて知った。

18:00 になってようやく行進の先頭が動き始めた。少し遅れて私たちも草むらから出て歩きだす。雨はシトシト、その日の宿泊地、ボービノ村に着いてもまだ降り続けた。雨は疲れを倍加させる。雨中の行進が足取りをさらに重くした。しかし、リュドミラさんによれば、この程度の雨はまだ序の口らしい。「明日はもっときついよ」。彼女は平然と言う。

ボービノ村では、ジーマ氏の友人宅というアパートに宿泊させてもらった。小さな部屋の床に寝袋でござ寝する。窓の外では、降りしきる雨の中で TENT を張る人の姿があちこちに見える。雨露がしのげ、椅子に座って温かい食事ができるだけでもここは「豪華ホテル」だ。こうして、キーロフでの 1 日目は過ぎていった。(つづく)



10~11月の予定

- 10 月 2 日 東京ロシア語講座(後期)スタート
- 10 月 15 日 大阪ロシア語講座(後期)スタート
- 11 月 17 日 JIC ロシア・セミナー(東京)
- 11 月 25 日 クラスノヤルスク民族舞踊団
チャリティコンサート(東京)

最新情報は JIC のホームページに随時掲載します。
是非、ご確認ください！



◆◆編集後記◆◆

猛暑の夏がようやく過ぎ、涼しい風が吹く秋が来ました。

年 4 回発行のインフォメーションですが、元 JIC モスクワスタッフのジーマ君が、最新のロシア、ウクライナ、バルト情報を送ってくれて原稿が多く集まったので、時期を失しないうちに臨時号を出すことにしました。印刷物にはせずに、JIC のホームページ上だけに掲載していますので、将来、「希少価値」が出るかもしれません。

尖閣列島、竹島、北方四島と、このところにわかに近隣諸国との領土問題が世情を騒がせるようになりました。領土問題は、各国のナショナリズムに火をつけやすいだけに、歴史的事実を踏まえた冷静な議論と平和的な対話は何よりも求められます。加熱する韓国、中国両国民が何ゆえに加熱するのも含めて、日本の過去と未来をよく考えたいと思います。(JIC 伏田昌義)